



塩谷瞬さん 東ティモールで “生きる力”を発見

©ShunShioya

2002年に独立を果たし
新たな国づくりが進められている東ティモール。
今年1月、この国を訪れた俳優の塩谷瞬さんは
未来に向かって立ち上がろうとする人々の力強い姿に
未知なる可能性を見た。

東ティモールの子どもたち。「彼らの笑顔がこの国の未来をつくっていくのだと感じました」

「紙芝居やゲームなど、保健ボランティアが工夫を凝らしながら保健教育に励んでいます。その成果もあり、乳幼児の健康状態にも改善が見られてうれしい」とシエラの吉森悠さん(撮影:久野真一)



新たな国づくりの現場で
感じたこと

「あ、みんなでジャンプしようー」
週末の昼下がり、インドネシアの隣国・東ティモールの海辺で、子どもたちと楽しそうに笑っている一人の日本人がいた。映画「パッチギ」で一躍時の人となり、映画、舞台などで幅広く活躍する俳優の塩谷瞬さん。今年1月、「なんとかしなきゅープロジェクト」の著名人メンバーとして、21世紀最初の独立国であるこの国を訪れた。
400年以上にもわたるポルトガルとインドネシアによる統治の時代を経て、2002年に一国家として生まれ変わった東ティモール。独立後も一時的な混乱はあったものの、現在は平穏を取り戻しつつあり、日本をはじめ国際社会の支援を受けながら、新たな国づくりが進められている。「国の現状、空気、人々の表情を、先入観を持たず素直に見てほしい」。アジアは何度も旅している塩谷さんだが、初めての東ティモール訪問に胸

を躍らせていた。

最初に訪れたのは、首都デシリから南へ車で一時間ほどのアイレウ県コトラウ村。NPO法人シエラ国際保健協力市民の会が、JICA草の根技術協力事業で保健医療支援に取り組んでいる地域の「一つだ。保健医療サービスへのアクセスが困難な農村部では、下痢や栄養失調といった予防可能な病気により5歳未満で命を落とす乳幼児も多い。そこでシエラはコミュニティ内で保健ボランティアを育成し、住民自らの力で、乳幼児の健康管理ができるよう支援している。「子どもたちの命は自分たちで守る」という意識と行動が、住民たちの間に生まれていて素晴らしい」と塩谷さんは感心していた。

続いて、青年海外協力隊の金田耕稔さん(青少年活動)が活動する首都の青年センター「Ba Futuru」へ。これは、現地語のテトゥン語で「将来のために」という意味。長年にわたる内戦で心に深い傷を負った子どもたちの「将来」のために、平和構築を目指した紛争解決・人権教育のほか、語学やスポーツ、音楽などのプログラムを行っている。塩谷さんは子どもたちと一緒に、紙風船など日本の遊びにチャレンジ。みんな大喜びだった。

実は塩谷さん自身、家庭の事情で学校にあまり通えず、小学生のころ新聞配達

国際協力を支える 現場の日本人たち

デシリ西部を流れるコモロ川の支流、ベモス川。この川から引かれた水が導

などをして一人で生活したこともある。それ故に現在は、「たくさんの人に助けられて今の自分がある。その恩返しをしたい」と、多忙な俳優の傍ら、国際協力をライフワークとしている。「東ティモールの子どもたちに、たとえ一日でも、心から『楽しかった』と思ってもらいたい。そのために僕に何ができるだろうか」。別れ際、自分に向かって手を振る子どもたちを見ながらそんなことを考えていた。

ヘルメットを装着して、給水施設の建設現場に。「僕も昔、工事現場でアルバイトをしていたことがあります。皆さん、仕事に対する姿勢はさすがプロフェッショナルですね」(撮影:久野真一)



水管を通り、浄水場を経由して首都に供給されている。しかし04、05年に発生した洪水により導水管が破損。現在、日本の無償資金協力により、給水施設緊急改修工事が進められている。工事を担当するのは大日本土木株式会社。文化の違いなどから現場の作業員たちと衝突することもあったが、「ただ怒るのではなく、きっちり目の前でやって見せることが大切です」と同社のプロジェクト責任者の阿南正典所長。塩谷さんは「毎日同じ作業の繰り返し。現場の雰囲気づくりのために誕生会などのイベントを企画していると聞き、阿南さんの人間的な深さ、温かさを感じました」と感銘を受けていた。
また、国内有数の稲作地域であるマナツト県では、JICAの稲作支援の現場を視察した。主食であるコメの半分以上を輸入に頼る東ティモールに対して、JICAは日本が持つ緊急無償資金協力で修復した灌漑施設を活用し、コメの生産性向上などに取り組んでいる。JICA専門家古殿晴悟さんから説明を受けながら、塩谷さんは「支援に頼りきりにならず、村人たちが自分たちでできることを探していく必要がある」と話した。
1週間の旅を通じて、自分なりの国際協力のヒントを得た塩谷さん。「現場で汗を流している日本人の姿、そしてそんな彼らの助けを得ながら未来に向かって立ち上がろうとしている人々がいること

Shun's photos



塩谷さんの掛け声と同時にジャンプ!
HP: shunshioya.com/
ブログ: ameblo.jp/shunshioya/



日本が支援した水道から出る水は「おいしい!」



恥ずかしそうにレンズを見る女の子 ©ShunShioya

今回の訪問に先立ち、オリンパス株式会社がCSR活動の一環としてデジタルカメラを塩谷さんにプレゼント。「東ティモールの人々の表情や風景、国の実情などを、写真を通じて伝えていきたい」

を、しっかりと伝えていかなければ。そう強く語る彼の瞳の奥には、確かに、静かな熱い思いが見えた。
今を生きる。これは、塩谷さんが座右の銘としている言葉だ。今回、現地でもまさに、今を生きる。人々の姿をその目に焼き付けてきた塩谷さん。これからは、世界中の「生きる力」を私たちに伝えてくれることだろう。

※途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクト。実行委員会は、NPO法人国際協力NGOセンター(JANIC)、JICA、国連開発計画(UNDP)。